

連載

48 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義 (64歳・内科)

掃除機が誤嚥した 患者さんの命を救った!!



最近の出来事です。アルツハイマー認知症と廃用症候群の女性(76歳)が高齢者施設に入所中、誤嚥して呼吸困難に陥り意識不明となりました。

「大変です!誰か来て!!患者さんがのどにつめたよ!」という食事介助中のヘルパーさんの悲鳴に近い大声が、たまたま訪問治療に来ていた医師の耳に飛び込んできました。一分一秒がその後の脳機能後遺症の有無や生命にかかわります。在宅専用車には救急セットが常備されており、その中には吸引器もあるのですが、それを取りに行っている間は時間も間にも合いません。急いで現場に駆けつけた医師が、誤嚥物(食物)を吐き出させようと体位をとり処置し続けましたが、なかなかうまくいきませんでした。そうこうしているうちに廊下を掃除していたスタッフの手に持っている掃除機がふと目に入ってきました。そこで、とっさにその掃除機を吸引器代わりに使ってみました。すると、「ス

ポッ」という音とともに異物が取り除かれたのです。やがて、患者さんの呼吸障害も改善し、大きく呼吸を試みるうちに顔色が良くなったのでした。

「調子はいかがですか?」と医師が尋ねると、患者さんは「おなかが減ったから何か食べものはない?」と答えました。それを聞いた周囲のみんなは唖然としながらも「何事もなくよかったなあ」と安堵したのです。そして同時に、人間の本能のひとつである食欲から生命の尊さを感じ得たのでした。

さらに、気づいたことがありました。いつも車椅子で徘徊している患者さんがずっとそばにいたことです。その車椅子の患者さんは、医師や介護スタッフに、幻覚症状なのでしょうか、食後「おなかすいた、ごはんが食べたい」とか「呼んでも誰も来てくれん」とか、終日施設のフロアを車椅子で移動しながら大声を張り上げている患者さんだったのです。誤嚥した患者さんと同

世代である車椅子の患者さんが、知らない間にそばで静かに見守っていたのはとても印象的でありました。

誤嚥の原因とは、通常、口から食物が入り咽頭部を過ぎた部分から背中寄りに食道から胃に流れる道と、呼吸して空気が前面の気管から肺に流れる道との二つに分かれますが、反射的に弁が働いて道を一本に導くのです。しかし歳をとると、徐々に筋力が弱まってきて常に隙間ができた状態になり誤嚥してしまうのです。

寿命が延びる時代とともに、栄養摂取のため胃ろう造設や高カロリー輸液(IVHポート)の可否を、ご本人や後見人に意思を確認しなければならなくなったのです。

※吸引が強いと、後遺症で咽喉頭浮腫や出血することがあるため注意を要します。さらに肺気腫などの合併症を引き起こす場合もあるため、その後の充分な見守りが必要となります。

「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 18名

(常勤6名、非常勤12名)

内科・外科専門医 15名

(国立がんセンター勤務歴有3名)

精神科専門医 2名

麻酔科専門医 1名

(ペインクリニック科)
※某医科大学 医師臨床研修
協力施設内定

Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>